

## 研究紹介

## ころと文化——日米の子どもの比較文化研究

今田俊恵 Toshie Imada

(ミネソタ大学児童発達研究所ポスドク研究員)

人のころは、その個人をとりまく文化、社会生活、人間関係によって育まれる。こう言うと「何をいまさらそんなわかりきったことを」と思われるかもしれないが、実際に文化背景の違う人々の考え方や行動が異なることが心理学の分野で研究され始めたのはわりあい最近のことである。そしてここ20～30年の間に加速度的に増えた文化比較心理学研究によって、欧米人とアジア人の心理的傾向の違いとその文化背景との関連性が、価値観、自己観、感情、動機、認知などさまざまな領域で明らかにされてきている。

## 注意傾向の日米差

日米間の文化差の例として、写真などを見たときや他者の行動を解釈する際に、アメリカ人は比較的その写真の中心となる物体や行動した人物の内的要因（性格など）に主に注意を集中するのに比べ（分析的認知と呼ばれる）、日本人は物体の背景や人物の置かれた状況にも注意を払う（包括的認知と呼ばれる）という違いがいくつかの研究で報告されている。この文化差はなぜ起きるのであろうか。日本の文化ではまわりの人との調和が重んじられ、またそのときの状況にあわせて行動することが望ましいとされるため、「いまどういう状況なのか」を読み取るスキルが重要となり、自然に注意は周囲の状況に向けられることが理由の1つではないかと考えられる。それに比べてアメリカの文化では自分の考えをはっきり述べることが重視され

るため、まず「自分はどう考えるのか、何をしたいのか」をよく知る必要がある。そして自然にその注意は周囲の状況よりも、行動の主体に向けられるのではないだろうかと考えられている。

## 文化的認知傾向の発達

文化に応じた認知傾向は、人々が社会生活を営む中でほとんど無意識に、徐々に身につけていくものだと言われている。そして私はそれが発達段階のわりあい早い段階で起こり始めるのではないかと考えている。たとえば日本の幼稚園ではお遊戯など協調や調和を育てる遊びをよく行うが、アメリカの幼稚園では「Show and Tell」という、それぞれの子どもが自分の大事にしている宝物をみんなに見せて1人ずつ発表するという遊びがある。また私が以前行った小学校の国語の教科書に載っている物語の日米比較研究でも、日本の教科書ではまわりの人たちの調和や思いやり、友情などをテーマにしているものが多いのに対し、アメリカの教科書では個人の目的の達成や人とは違うユニークさをテーマにしているものが多いことがわかっている。これらの子どもたちを取り巻く環境や文化的産物の違いは、文化に適した心理傾向の発達に少なからず影響を及ぼしているに違いない。

実際に子どもたちを相手に実験をしてみると、アメリカと日本の子どもの態度の違いに気がつく。日本の、とくに年少の子どもは母親と離れて調査室に入るのを不安がることが多

い。そのため、隣の待合室のドアを開けて母親に子どもから見える場所にいてもらうか、不安が大きい場合は母親に同席してもらうなどの処置をとっている。しかしアメリカの子どもは、「さあ始めようか」と言うとともに親と離れることに不安な様子も見せず1人ですすたと調査室に入っていく。すでに4歳児にして「独立したアメリカ人」の姿を垣間見る気がする。これは日本の母親の多数が専業主婦で子どもとともに過ごす時間が長いのに比べ、アメリカの親は共稼ぎが多く、ベビーシッターに預けられることなどにも慣れているからかもしれない。また日本では母親が赤ん坊といっしょに寝るのが一般的なのに対し、アメリカでは別室に寝かせるという育児方法の違いに由来している可能性もある。

## エビングハウス錯視で検証する文化的注意傾向の発達

大人で見られる注意傾向の日米文化差は子どもでも見られるのか、またそうだとすると何歳頃からそういった文化差が現れるのか。この疑問を解き明かすために現在私はミネソタ大学児童発達研究所のステファニー・カールソン先生と京都大学の板倉昭二先生との共同研究として日本とアメリカの4～9歳児を対象に研究を行っている。今回の実験では、過去に大人を対象に行われたさまざまな方法を子ども用に作り直し、子どもたちがゲーム感覚で楽しみながら行えるようなものを用いている。ここではその中でもエビングハウス

錯視を使った方法を紹介しよう

図1は実際に実験で使っている課題の1例である。この例では左のオレンジ色の円の方が右のオレンジ色の円よりも直径が4パーセント大きい。しかしほとんどの人には右の円の方が大きく見えるだろう。これは大きい円に囲まれているときは小さく見え、小さい円に囲まれているときは大きく見える、すなわち「エビングハウス錯視」と呼ばれている現象である。この錯視現象はオレンジ色の円を見るときにまわりのグレーの円が無視できない、つまり包括的注意傾向が高い人（日本人に多い）ほど強く出ると考えられる。実験ではこのような刺激（中心の2つのオレンジ色の円の直径差が2～18%のもの）をいくつも子どもたちに見せ、大きいと思うほうのオレンジ色の円を選ばせた。

現在データを収集している段階なので最終結果が出るのはまだ先のことになるが、今回は現段階で得られたデータ（日本人82人、アメリカ人61人）をもとに仮報告をしよう。図2は4～5、6～7、8～9歳の3つの年齢グループの正解率を示している。おもしろいのは両国ともに年齢が増すにつれて正解率が悪くなっていることだ。つまりこのような錯視は人々が成長していく過程で

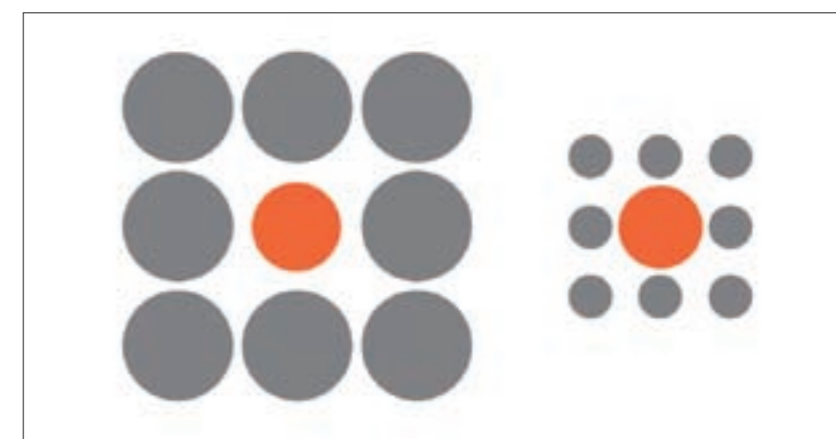


図1 エビングハウス錯視課題の一例。実際には左のオレンジ色の円の方が右のオレンジの円よりも4%大きい。

次第に身につけていくものであると考えられる。さらに日米の正解率を比較すると4～5歳では日本の方が若干正解率が高いのに比べ、6～7歳ではむしろ逆で（2～6%の違い）で、8～9歳では全体に、日本人の正解率がアメリカ人より低くなっている（2%の課題で違いが見られないのは、すでに正解率がゼロに近くそれ以上下がりが無いためだろう）。データをすべて取り終わってみたいと決定的なことは言えないが、成長とともに日本の子どもたちの注意傾向がアメリカの子どもたちに比べると包括的になるために錯視がより起こりやすくなり、このような文化差が現れるのではないかと考えられる。

今回の実験ではエビングハウス錯

視のほかにもいろいろな方法を用いている。たとえば何枚かの写真を見せてそれについて自由に語らせ、中心となる物体についての言及と背景に関する言及の量を比較している。また「間違い探しゲーム」と称して1カ所だけ違っている2枚の写真を交互に見せ、その「間違い」を探させる。そしてその「間違い」が中心となる物体にある場合と背景にある場合の正解率と反応時間を比較している。さらにこのような文化的注意傾向の発達が他の領域での発達にどう関連しているかを調べるために、認知的な切り替えや抑制の能力に関連する実行機能や短期記憶能力などを測るゲームも取り入れている。機会があればまた報告をさせていただきたい。

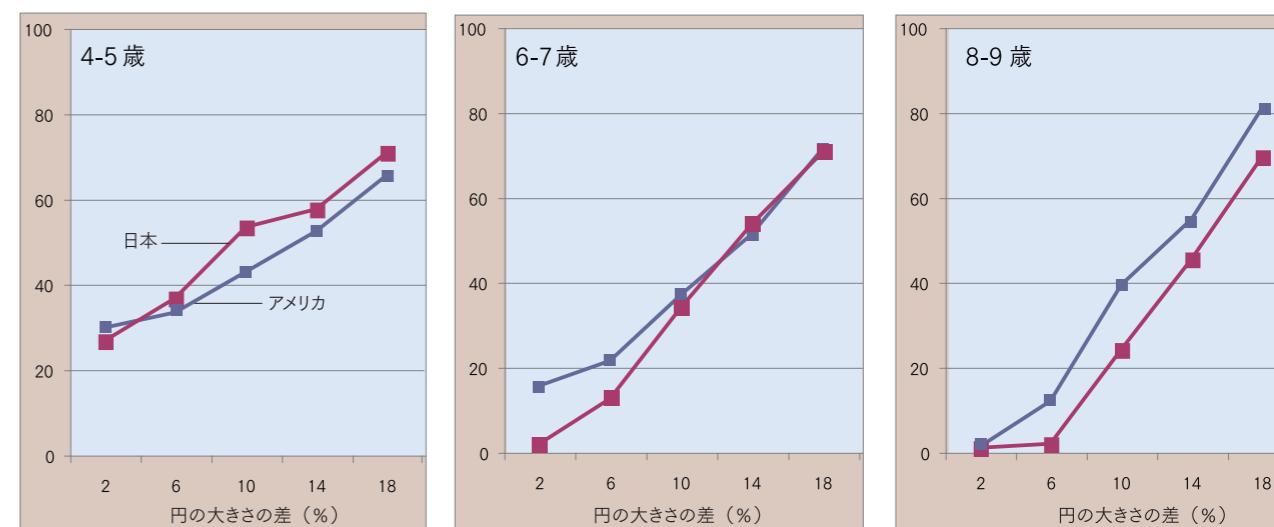


図2 年齢別に見たエビングハウス錯視課題の正解率。年齢が増すにつれ日本の正解率がアメリカに比べて低くなっている。